

人間の条件

第1部 純愛篇、第2部 激怒篇、第3部 戦雲篇、第4部 望郷篇、第5部 死の脱出、第6部 曠野の彷徨

2005(平成17)年7月9日鑑賞(シネ・ヌーヴォ)



監督=小林正樹/原作=五味川純平/脚本=松山善三、小林正樹、稲垣公一/出演=仲代達矢/新珠三千代/淡島千景/石浜朗/山村聡/宮口精二/小沢栄太郎/三井弘次/安部徹/小林トシ子/芦田伸介/殿山泰司/東野栄治郎/南原宏治/有馬稲子/佐田啓二/安井昌二/桂小金治/田中邦衛/佐藤慶/多々良純/高峰秀子/中村玉緒/川津祐介/岸田今日子/金子信雄/笠智衆/三島雅夫/河野秋武/山茶花究/諸角啓二郎/岩崎加根子/内藤武敏/清村耕次/瞳麗子(松竹配給/1959~61年日本映画/9時間38分)

……1959年から61年にかけて、五味川純平の原作を松竹と小林正樹監督が総力をあげて映画化した全6部の大作は、戦後60年の今、あらためて多くの日本国民に味わってもらいたい映画。主人公梶のヒューマンイズム溢れる力強い生き方は、誰もが真似のできるものではないが、こんな生き方に感動することは、誰でもできるはず。今年4月の反日デモ、そして反日抗争勝利60周年の記念行事が相次ぐ中国とどう向かい合うべきかについても、この映画を観れば、新たな視点が生まれるのでは……？ 約10年後に日活で製作された山本薩夫監督の『戦争と人間』全3部作とともに、永久に心にとどめる名作として心から感動したいものだ。

私と『人間の条件』との出会い

私が五味川純平の小説『人間の条件』(三一書房)の新書全6巻を読んだのは、多分中学1年生の時。そして映画を観たのも中学生の時。第1部・第2部の、まだ平和な状況下に登場する労務管理をめぐるいろいろな議論もよく覚えている。しかし、何よりもこの映画で衝撃を受けたのは、第3部・第4部での軍隊に入ってから激しい「しごき」とそれに耐える主人公の強さ。この軍隊式のしごきは、後に勝新太郎主演の「兵隊やくざ」シリーズでも再三お目にかかることになる日本陸軍特有のもの……？ そして第5部・第6部では妻美千子を求めての超人的な脱出劇で見せる主人公の驚異的な気力と体力に圧倒されつつ、そこに大きな哀

しみも……。さらに多感な中学生として強く印象に残っているのは、何といても梶の兵舎を訪ねてきた妻美千子と一晚を過ごし、梶が「君の裸を見せてほしい」と美千子に頼み、月明かりの中、美千子がそれらしい行動をするシーン。これが、私が『人間の条件』と接した原点(?)だ。

大学での『人間の条件』をめぐる大激論

1967(昭和42)年4月大阪大学に入学した私は、勉強などそっちのけでたちまち学生運動にのめり込んだ。そんな時代の私は、毎晩集まる友人たちとアパートの部屋の中で、徹夜に近い議論の毎日。そんな生活の中で、『人間の条件』めぐって徹夜の大激論をしたことを今でもよく覚えている。その論争の焦点は、梶は、ヒューマニズムにあふれた一般的・平均的な人間なのか? それとも英雄的人間なのかということだったが……?

戦後60年のベスト企画!

この『人間の条件』全6作は合計9時間38分だから、6本の一挙上映とかオールナイト上映に最適……? そのため、何かの節目ごとに一挙上映が企画されていたようで、私が1度体験したのは弁護士登録の数年後のこと。友人の女性を誘って、オールナイトを観たが、上映終了後何事も起きなかったのは、チト残念……? 今回『人間の条件』一挙上映を企画したのは、私の大好きな映画館「シネ・ヌーヴォ」で、そのうたい文句は「戦争の真実を描いた感動巨篇 戦後60年記念、超大作一挙上映!!」というもの。つまり戦後60年の今、「あの戦争」を考えるのに最適の映画と判断したわけだ。

坂和流『人間の条件』と『戦争と人間』比較その1

『人間の条件』は新書全6巻であるのに対し、同じ五味川純平原作の『戦争と人間』は全18巻。それを映画化したのは山本薩夫監督で、全3部、1970年、71年、73年のこと。この『戦争と人間』は、第1部「運命の序曲」194分、第2部「愛と悲しみの山河」182分、第3部「完結篇」189分、合計565分(9時間25分)だから、時間的には『人間の条件』とほぼ同じ。

しかし、この映画『戦争と人間』は予算の都合上で、第3部で完結させなければならなかったため、原作の後半をすべてカットしてしまい、ノモンハン事件で日本がコテンパンにヤラれたところで、無理やり完結させてしまったのは少し残念（『シネマルーム5』173頁参照）。

『人間の条件』と『戦争と人間』のどちらが面白いか、と聞かれれば私は即座に『戦争と人間』と答える。なぜなら、あの時代の満州を焦点とした中国と日本の政治・経済情勢や日本の軍部や財閥の狙いという大きな視点で描かれた物語であることや、登場人物の多彩さを考えれば、圧倒的に『戦争と人間』の方が上だと思うから。それに対してこの『人間の条件』は決して面白い映画ではなく、スーパーヒーローとしての梶の生き方や徹底したヒューマニズムを通じて、「あの戦争」をじっくりと考えさせるもの。1960年前後につくられた『人間の条件』と1970年前後につくられた『戦争と人間』は、わずか10年しか離れていないが、「あの戦争」を描く視点は全く異なるものだ。さて、あなたは『人間の条件』と『戦争と人間』のどちらが好き……？

坂和流『人間の条件』と『戦争と人間』比較その2

小林正樹監督は、この映画づくりにおいて、「戦争反対」のスタンスを明らかにしている。この映画が公開された1959年といえば、言うまでもなく「60年安保」の直前で、日本全体が政治闘争で沸きあがっていた時代。「日本をアメリカの軍事基地とするな！」というスローガンは、日本全国津々浦々に広がっていた。そんな時代背景と小林正樹監督の思想信条を受けて、この映画は、第1部・第2部では梶と親友の影山や同僚の沖島、第3部・第4部では梶と新城一等兵や丹下一等兵、そして第5部・第6部では梶と寺田二等兵らとの間の「論争」が数多く登場し、かなり本質的でつつこんだ議論が展開される。また、第1部・第2部では、侵略され抑圧された中国人たちと梶、そして第5部・第6部では日本を壊滅させた社会主義国ソ連の赤軍と捕虜となった梶との間の議論も盛りだくさん。

他方、『戦争と人間』では、満州支配を目指す関東軍と新興財閥のリーダーとの間の、日本の夢を語る「楽しげな会話」とともに、その正反対にある、侵略戦争に真正面から反対する日本共産党の戦う姿が感動的に(?)描かれる。これは

山本薩夫監督の思想性を色濃く反映したものでしょうが、学生運動をやっている中で日本共産党の指定文献を一生懸命勉強していた私にとっては、そのストーリーはすごく面白く新鮮なものだった。『人間の條件』の主人公である梶は超スーパーヒーローだが、同時に真正面から戦争反対を唱えることはできなかった一般人だというのがミソ。しかし、一般人でありながら、この映画の中で示される強靱な梶のヒューマニズムは一体どこからうまれるのだろうか……？

2005(平成17)年7月12日記

第1部・第2部の舞台は中国南満州の老虎嶺鉱山

映画の冒頭は、梶（仲代達矢）と美千子（新珠三千代）が雪の中を2人並んで歩くシーンから。時代は1943（昭和18）年。日本敗戦の1歩手前だ。美千子は梶からの「結婚しよう」という言葉を待っているが、いつ召集令状が来るかもしれない状況下で、梶はそれをためらっていた……。

しかしそんな2人は今、老虎嶺鉱山に向けたトラックの上に。満鉄調査部勤務中に梶が書いた中国人労働者の労務管理についての論文が認められ（?）、召集免除と引きかえに、それを現地で実践せよということになったわけだ。しかして、第1部・第2部の舞台は中国南満州にある老虎嶺鉱山。ここでの一般工人と特殊工人を相手として、労務管理の仕事で見せる梶の生き方がテーマとなるわけだ。

主要な争点は？

現地監督の岡崎（小沢栄太郎）は、古屋（三井弘次）らとともに鉱山で働く現地人の一般工人たちに対して、過酷なノルマを課して、これを牛馬同然にこき使いながら、その利益をピンハネしていた。一般工人とは半（?）強制的に徴集した現地に住む中国人の労働者たちのことだ。しかし、老虎嶺鉱山の所長黒木（三島雅夫）は大きな見地から（?）それを黙認。しかし、中国人労働者を働かせるためには労働条件の改善が1番と考える梶は、彼らの抵抗の中、果敢に自説を実行した。これを支えたのが沖島（山村聡）や梶の部下の陳（石浜朗）だった。そんな梶の努力が少しずつ報われ、2割生産増強の目標が達成された時、梶や沖島には新たな難問が……。

一般工人と特殊工人

それは憲兵の渡合（安部徹）からの「中国人捕虜600名を払い下げる」という、ありがたい(?)お達し。これが「特殊工人」と呼ばれる人たちだ。輸送列車の中にぎゅうぎゅうに詰め込まれた捕虜たちは、飢えのために息も絶え絶えの状態。こんな捕虜たちを2300ボルトの電流を流した鉄条網の中に入れ、強制労働に従事させるのは並大抵の苦勞ではない。渡合からの指示は「殺してもよい。しかし決して脱走させないこと!」という非人間的なものだった。そのうえ黒木所長からの指示は、捕虜の適切な管理のため梶に「女郎屋のおやじ」も同時にやれという、ありがたいもの……? 梶は休暇も取らず、懸命に人間としての尊厳を保つべく、この特殊工人管理の仕事に取り組んだが……?

特殊工人と娼婦との恋、そして脱走事件

特殊工人たちのリーダーである王享立（宮口精二）ら数名のリーダーたちとの「対話」を通じて信頼を獲得しようと努力する梶だったが、強硬派一辺倒の男がどこにでもいるもの。その最先鋒が高（南原宏治）だった。ところがそんな高と特殊工人の慰問(?)に訪れた娼婦の楊春蘭（有馬稲子）との間に恋が芽生えたから不思議なもの……。

他方、朝鮮人の張命賛（山茶花究）は女郎屋の女将の金東福（淡島千景）と結託して一般工人や特殊工人の脱走ルートをつくり利益をピンハネしていた。そして梶が美千子の頼みを受け入れてはじめての休暇に臨んだ時、張たちが仕組んだ脱走事件が勃発! 梶は休暇を投げ出して職場に戻ったが……?

遂に特殊工人たちが反乱

脱走はその後も再三くり返された。しかし、ある日脱走を企んでいた悪者たちの手違いによって、鉄条網の電流を切らないまま決行されることに。その現場に立ち会った陳は、悪党一味の圧力に屈して梶を裏切ったことへの良心の呵責から、自ら鉄条網に……。こんな大騒動中で仲間の信頼を失った高はそれを挽回すべく、ある日現場監督の岡崎に楯突いたため、反抗とみなされてしまった。そして、裁

判も受けないまま、河野憲兵大尉（河野秋武）の命令によって、高ら7名は斬首の刑に処せられることに……。

梶の人間としての心の叫びは……？

この処刑は、剣の使い手自慢である憲兵隊の渡合の手によって実行されることになったが、その立会人を命じられたのは何と梶。多くの特殊工人たちが見守る中、梶はなすすべもなく、現場に立ちつくすだけだった。1人目の首を斬り、楽しげに部下に対して「やってみるか？」と水を向ける渡合。これはまるであの南京大虐殺での「百人斬り」の姿を彷彿させるもの……？

2人目の処刑が終わり、3人目は高。目隠しを拒否しながら最後まで反抗する高が遂に斬られた時、梶は思わず「やめてくれ！」と叫んでいた。そして、そのタイミングをうまく捉えた特殊工人のリーダー王享立の指揮するデモンストレーションによって、処刑は中止されることに。しかしその後に梶を待っていたものは……？ それは、徹底した梶への拷問と、約束されていた徴兵免除の取消しという残酷なものだった。

2005(平成17)年7月13日記

第3部が描くのは、軍隊の不合理性！

徴兵免除を一方的に取り消された梶は関東軍に配属され、極寒の北満にいた。軍隊では初年兵は古兵からいびり倒されるのが慣例。そのうえ梶は、憲兵に反抗したため今ここにいると噂されていた。そのため、アカとみなされて、冷や飯を喰わされていた新城一等兵（佐藤慶）と同様、常に冷たい視線が……。そのうえ梶は、特に反抗する意思はないものの、いわゆる「態度がデカイ」ため、常に古兵のしごきの対象に……。「第3部」では、これでもか、これでもかこれでもかというほどに軍隊という組織の不合理性が描かれているので、それに注目！ 梶は人の数倍の体力と気力があつたから、その中でも耐えられたものの、体力も気力も弱い小原二等兵（田中邦衛）などは、鉄砲は命中しないわ、歩行訓練では落伍するわの状態だったため、鉄拳制裁の毎日の中ついに……。

一晩限りのすばらしい夜も……

こんなイヤなことだらけの初年兵暮らしだったが、そんな梶をはるばる訪れてきたのは愛妻の美千子。「無謀ですなあ」と言いながらも訪ねてきたものはやむをえない？ 中隊長は特別措置として、一晩限りの宿の提供と訓練の免除を認めることに……。そんな中、展開される月明かりのシーンが「裸になって窓辺に立って欲しくないか。君の裸をこの目に焼き付けておきたいから」という有名なセリフとそのシーン……。そりゃすばらしい夜になったはずだが、翌日はこれを妬む古兵たちからのしごきの嵐が……。

ソ連への脱走は可能……？

ソ連への愛の逃避行を執行し、「赤い恋の逃避行」と呼ばれて一躍有名になったのは新劇女優、岡田嘉子と演出家、杉本良吉との亡命劇。これは1938年1月3日にホントに起きた大事件だ。その物語を彷彿させるのは、思想犯（アカ）を兄に持つ新城一等兵の脱走劇。営倉入りを命じられた新城が営倉に入ったとき、突如起こったのが、「野火だ！」という声。またたく間に広がってくる野火を鎮めるため、部隊は総力をあげて対処したが、その混乱に乗じて新城は1人野火の煙の中を反対方向に……。さて、その成否は……？

病院内で得た親友の丹下

新城の脱走を手助けした梶は、泥水の中にはまりこんで半死状態。そんな梶が意識を回復したのは病院のベッドの上。ここからが第4部の始まりだ。この病院で梶はやさしくて美しい徳永看護婦（岩崎加根子）やアカがかった一等兵の丹下（内藤武敏）と出会うことに……。徳永看護婦は、梶と知り合い仲良くしているところを鬼婦長（？）に発見されたため前線に飛ばされることに。そして丹下もキズが治ったと判断されて前線に行くことになったが、2人は「きっとまた会えるさ」と楽観的……。病が癒えた梶が配属されたのは、青雲台地。そしてそこには、老虎嶺鉱山へ行く前に別れた親友の影山少尉（佐田啓二）がいた。影山少尉の庇護の下に上等兵となった梶は、初年兵の教育係を受け持つことに。軍隊の不合理性を身にしみ感じていた梶は、せめてもの軍隊内改革（？）とばかり、「俺は初年兵を殴らない」との教育方針をたてて、これを実践しようとしたから、

当然ここでもさまざまなイザコザが……？　ここで面白い登場人物が1人。それは20歳そこそこの寺田二等兵（川津祐介）。彼の父親は陸軍少佐だったため当然徹底した軍人教育を受けており、梶のような軟弱な（？）教官はありがた迷惑……？　寺田はコトあるごとに梶と議論し、反抗したが……。

最前線での塹壕掘り

第2次世界大戦中のドイツとフランスとの西部戦線における「塹壕戦」を描いた戦争小説の名作がエーリッヒ・マリア・レマルク作の『西部戦線異状なし』。膠着した西部戦線では、まさに塹壕が命！　日中戦争の時代やソ連と対峙していた関東軍においては、このヨーロッパの戦いほど塹壕戦は発達していなかったが、それでも塹壕の必要性、重要性は明らか。たしかに、青雲台地に梶らが築こうとしていたのは塹壕といえるものだったが、突然進入してきたソ連軍の前に影山らの部隊はすでに全滅。明日にも迫ってくるソ連の戦車を前にして梶らが掘っているのは、塹壕と言えるものではなく、いわゆる「たこつぼ」と呼ばれる、人1人入れるだけの小さい穴。この穴だけが自分の命を守る唯1つの砦というわけだ。

「たこつぼ」はたちまち戦車に蹂躪

ごうごうと音をたてながら進行してくるソ連の大戦車部隊に対して、関東軍の後方から撃っていた野砲もすぐに沈黙……。そして古兵たちが所属していた、対戦車部隊もたちまち全滅。小銃部隊の梶たちは弾の数を気にしながら各自射撃していたが、ソ連の戦車群によって「たこつぼ」はたちまち蹂躪。そして、とっさに寺田を引きずり込んだ「たこつぼ」の中で、梶は九死に一生を得ることに……。そしてしばらくすると……？

しごきまがいの訓練で強兵を育て、最強を誇っていたはずの関東軍は、強力なソ連軍の前に一瞬にして壊滅。梶たちは友軍から完全に途絶された状態で戦場に取り残されることに。さて梶や寺田は、そして生き残りの敗残兵たちはこれからどうするのだろうか……？

2005(平成17)年7月13日記

第5部・第6部は美千子を求めての脱出劇！

第5部は「死の脱出」、第6部「礦野の彷徨」とサブタイトルがつけられているとおり、全編美千子を求めての脱出劇が描かれる。しかし、そのラストは……？ 脱出劇の中、際立って目立つのは梶の強靱な精神力と肉体。すなわち前者は敗戦という状況の中、それまでの価値観がすべて崩れさり、どんな考え方でどんな道を選ぶのがベストなのかがサッパリわからない中、梶は美千子のもとに帰るといふ明確な指針を持ち、その目的に集中できるすばらしさ。そして後者は、20歳そこそこの寺田でさえ舌を巻くような足の強さ。脱出のために必要なことは、とにかく歩くこと。したがって逆に老人や女子供は、否応なく途中で脱落していくことに……。

密林を抜けられるか？

戦場を離脱した時は、梶と寺田そして弘中伍長（諸角啓二郎）の3人だけだったが、脱出の旅を続けているうちに、あちこちで敗残兵や避難民たちと出会うことに。戦争は終わっても、友軍との合流を希望するのが兵隊の人情……。したがって、将校や兵隊の中には集団を組んでしばらく山に立てこもると息巻く者たちも……。しかし、梶はあくまで美千子の待つ（？）南満（南満州）を目指す脱出行を選んだ。

迷い込んだ密林の中で梶たちが出会ったのは、避難民の老師教夫婦そして慰安婦の竜子（岸田今日子）と梅子（瞳麗子）たち。そして部隊から落伍した匹田一等兵（清村耕次）など。彼ら彼女らは梶の強靱なリーダーシップに頼ってきたため、梶はこれを引率して地図も磁石もないまま密林の中を彷徨い歩いた。水も食料も尽きる中、果たして一行は生きてこの密林を抜けられるのだろうか……？

早くも中国人の民兵組織が！

一難去ってまた一難。密林をやっと脱出した梶たちだったが、生き残ったメンバーたちは早くも組織された中国人の民兵たちの攻撃にさらされることに……。民兵たちからみれば、日本人であれば、兵隊も民間人も、そして男も女もないのは当然。束の間の平和を楽しんでいた梶たち一行は……？

ある姉弟のストーリーも……

梶たちが出会った避難民の中に2人の姉弟がいた。この姉を演じているのが、若き日の中村玉緒。親戚の家に来ていた時にソ連軍に蹂躪されたため、北湖頭の家まで帰りたいというのが彼女の願い。梶は逆に自分と一緒に南満に行くことを提案したが、彼女はどうしても北湖頭に帰りたいため、途中まで送ってほしいと懇願。これを快く(?)引き受けたのが、匹田と途中から合流していた敗残兵の桐原伍長(金子信雄)。この姉弟に対して、2人の兵隊がとった行動は……?

丹下の選択は?

途中で合流したアカが持っている(?)丹下一等兵は、「あの戦争」が日本の敗北で終わったことを知ると、ソ連の赤軍は日本軍のような侵略するための軍隊ではないという、社会主義的思想をどこかで信じていた。しかし、果たして実態はどうか? それはあくまで理論上のことだけで、机上の空論にすぎないのではないか? そんな思いは梶も同じ。

2人は時々そんな議論をしながら脱出劇をくり返していたが、遂にある時点で丹下はソ連軍への降伏を決意。もちろん、どちらの選択が正しいのかは誰にもわかるものではないから、梶もそれを止めはしない。さて丹下の選択は……?

別れた直後、ダダダーという音が聞こえたが、これは果たしてソ連軍の自動小銃の音だったのか、それともキツツキの鳴く声だったのか……?

転機となった開拓部落での事件

脱出劇の中、梶たちはある開拓部落を発見。用心しながらその中に入っていくと、そこは1人の長老(笠智衆)の他は多数の女ばかりの村。逃げるあてもなく、ここにどまっている女たちは、日本兵には畑を荒らされ食料を奪われるが、女たちを求めてやってくるソ連兵は黒パンを持ってきてだけマシ……と梶たちに語った。そんな悲しい現実に対応しながら生きていた女たちは、梶たち一行と一夜限りの安らぎの時間をもった。しかし翌日、梶に従って出発するか、それともここに残るかと話しているところに、突然現れたのが自動小銃を持ったソ連兵の一

部隊。梶たちは物かげに隠れ、これを迎え撃つ態勢をとったが、とっさに高峰秀子扮する部落のリーダー格の女がソ連兵の前に飛び出し、「兵隊さん、撃つのはやめてくれ！」と叫んだから、こりゃ万事休す……。やむなく梶は高々と両手を挙げて降伏することに……。

女たちにしてみれば、ここで撃ち合いがはじまれば、どちらが勝ってもこれ以上ここにとどまることができなくなるのだから、当然の現実的選択といえばそんなのだが……。これも人間が生きていくための悲しい1つの選択……？

捕虜収容所での生活は？

劇団四季のミュージカル『異国の丘』（01年）は、ソ連軍の捕虜となってシベリアに抑留された日本人捕虜の悲惨さが1つのテーマだったが、梶たちは「シベリア送り」とされなかったから、まだマシな方……？ それでも捕虜の惨めさはどこでも同じで、食糧事情は悪く、労働条件は悪いもの。かつて梶が老虎嶺鉦山で目指していたような人道的配慮をするヤツはソ連の赤軍にはいないのか……？ 梶はまだまだ体力が残っていたから大丈夫だったが、ソ連軍との戦闘で右腕を負傷している寺田二等兵にはこの労働はきつすぎるもの。そこで一計を案じた梶は……？

収容所にもうまく立ち回るヤツが……？

脱出劇の中、あの北湖頭へ帰りたいという姉弟を送っていき、「適当に扱ってやったよ」と平然と言い放った匹田と桐原に対して怒った梶は彼らを追い出してしまったが、梶と寺田は何とこの桐原に捕虜収容所の中で出会うことに。そして桐原はここでもうまく立ち回っていたらしく、今は日本人捕虜を管理する立場になって甘い汁を吸っていた。梶や寺田に恨みを持つこの桐原は、生きていくために残飯あさりをやっていた寺田を発見するや、寺田に攻撃のターゲットを……。

赤軍の裁判は

桐原の行為を告発し、捕虜の待遇改善を要求した梶は赤軍の裁判を受けることに……。今でこそ司法の世界では「法廷通訳」の大切さと難しさが強調され私も数回講義をしたが、こんな捕虜収容所の中で日本人兵士がつとめている通訳は権

力の「お先棒かつぎ」みたいなもの。平気で誤訳したり、挙げ句の果ては正反対の言葉で伝えることも……？ そのため、きわめて当然の要求をしたはずの梶は、何と赤軍の将校から「ファシストのさむらい！」とののしられることに……。

梶は老虎嶺鉸山の現場で、鉄条網の中の特殊工人たちと人間としての心の対話を望み、何とかそれを実践しようと努力していた。しかし言葉が通じないこの捕虜収容所の中では、逆の立場からの同じような梶の努力は空回りし、事態を悪くするばかり。その結果ついに梶は処罰として、より遠方のより労働条件の悪い労役に就かされることに……。梶はそれもやむなしとして従ったが、心残りは、右腕の負傷で苦しんでいる寺田のこと。梶は周りの捕虜たちに「寺田をよろしく頼む」と言い残して出て行ったが……？

丹下と再会したものの

裁判によってより重い労働に就かされた梶は、そこで思いがけない人物と再会した。それはあの脱出行の中、ソ連軍への降伏の道を選択した丹下一等兵。その結果、一足先に捕虜収容所に入っていた丹下も、梶との再会を喜び、「あまり無茶をするな！」と梶に忠告したが……。この映画ではこの後の丹下の生き方は描かれていないが、社会主義国ソ連への理解を示す丹下だから、その後は何とか無事に生き抜いたことだろう……。しかし一方梶は……？

寺田の惨殺を聞いた梶は？

無事、重労働の労務を終えて帰ってきた梶を待っていたのは寺田の惨殺という不幸なニュース。もちろんケガが悪化したなどのやむをえない理由であれば梶も納得するはずだが、寺田を惨殺したのはあの労務管理の桐原だった。寺田の死因は、少し元気になったため残飯あさりにでかけた寺田を見つけた桐原が、ここぞとばかり寺田を痛めつけたうえ、便所の肥汲みの仕事をいいつけ、ぶっ倒れるまでそれをやらせたこと。これを聞いた梶は、もはや理性を失ったかのように「ある計画」を実行したうえ、遂にこの捕虜収容所を脱出。そしてただ1人、美千子を求めて、南満への旅に……。さて、その美千子を求める旅の結末は……？

2005(平成17)年7月14日記